

「即自的階級」と「対自的階級」に関する一考察

一階級概念把握の二つのレベルに関連させて一

北 村 寧

I 階級概念における二つのレベル

マルクスの階級概念の把握において、相異なる二つのレベルが存在することはよく知られているところである。第一のレベルは「生産関係レベル」ともいうべき見地であって、このレベルにおいて階級は生産手段の所有関係によって区別された社会的集団と規定することができる。第二のレベルは「運動主体レベル」ともいうべき見地であり、このレベルにおいては階級は特定の利害をもって組織され闘争する社会的集団としてとらえられる。前者が「客観的存在としての階級」であるのに対して後者は「運動主体としての階級」をあらわしている(1)。

マルクスが階級概念をこのような二つのレベルで把握していることを示す若干の文言を引用してみよう。まず、「生産関係レベル」の階級概念としては『資本論』全3巻の最終章(第52章)に登場する諸階級をあげることができる。その章の冒頭でマルクスは「賃金、利潤、地代をそれぞれの収入源泉とする単なる労働力の所有者、資本の所有者、土地所有者、つまり賃金労働者、資本家、土地所有者は、資本主義的生産様式を基礎とする近代社会の三大階級をなしている」(2)と述べている。資本主義社会の「三大階級」である賃金労働者、資本家、土地所有者が生産手段の所有関係からとらえられた階級概念であることは、マルクスが「単なる労働力の所有者、資本の所有者、土地所有者、つまり賃金労働者、資本家、土地所有者」と言い換えていることから明らかであろう。このようにマルクスには「生産関係レベル」でとらえられた階級概念が明確に存在するのである(3)。

他方、マルクスには「運動主体レベル」の階級

概念も存在する。マルクスは『共産党宣言』において、ブルジョアジーに対するプロレタリアの闘争の発展過程について、はじめは個々のプロレタリアと個々のブルジョアジーが衝突しているが、やがて、プロレタリアの団結が広がり、地方的闘争から全国的闘争へと発展し、階級闘争が政治闘争にまで発展すると指摘した後、次のように述べている。

「プロレタリアが階級に、それとともにまた政党に組織されていくこの過程は(Diese Organisation der Proletarier zur Klasse, und damit zur politischen Partei),労働者そのもののあいだの競争のために、たえずくりかえし打ち碎かれる。だが、この組織は、いつでもいっそう力づよく、強固で有力なものとなって復活する。それは、ブルジョアジーの内部の分裂を利用して、法律の形で労働者の個々の利益の承認を強要する。イギリスの10時間労働法がそれである」(4)。

この文中における階級が「生産関係レベル」でとらえられた「単なる労働力の所有者」=賃金労働者を意味するのではなく、ブルジョアジーに対抗して同盟(Koalition)や結社(Assoziation)をつくっているプロレタリア、労働組合や政党に組織されている労働者をさしていることはいうまでもない。ここにおいて階級概念は労働組合や政党のような、特定の利害をもち、その利害の実現のために運動する社会的集団として、換言すれば、階級闘争の現実的でない手として、「運動主体レベル」で把握されているのである(5)。

なお、ついでまでに指摘すると、階級概念を二つのレベルから把握することはマルクスに固有なものではなく、彼と理論的立場を異にするとはいえ、社会学的階級論の見地に立つ論者にもみられるこ

とである。例えば、M・ウェバーは財産階級・営利階級・社会階級という三つの階級と階級的利害関係者の組織化としての「階級団体 Klassenverbände」を区別していたし(世良晃志郎訳『マックス・ウェーバー経済と社会 支配の諸類型』第四章)、ウェーバーからの強い理論的影響のもとに闘争理論を展開したR・ダーレンドルフも「準集団 quasi-group」から「利害集団 interest group」への発展について述べている(富永健一訳『産業社会における階級および階級闘争』)。また、マルクスの階級論を強く意識しつつ、独自の社会的勢力論を樹立した高田保馬も「単なる社会的部類としての階級」と「既に一集団としての意識を伴える階級」とを区別している(『階級及第三史観』)。これらの論者たちのレベル設定の仕方は決して一様ではないが、ともかくも、いわば二段がまえで階級概念をとらえていることに留意しておきたい。

ところで、問題はこのような階級概念の二つのレベルがどのように関連するののかということである。この点についてはF・エンゲルスの有名な見解が存在する。エンゲルスは『フランスにおける階級闘争』(1895年刊行)の序文で「ここにあらたに出版される著作は、マルクスが彼の唯物論的な見解によって現代史の一時期を、与えられた経済状態から説明しようとした最初の試みであった」(6)と述べ、その著作でのマルクスの唯物論的方法について、「政治的闘争を、経済的発達から生じた現存の社会階級(Gesellschaftsklasse)および階級分派(Klassenfraktion)間の利害の闘争に還元する(zurückführen)こと、そして、個々の政党が、これらの階級や階級分派の多かれ少なかれ適当な表現(Ausdruck)であることを証明すること」(7)と規定している。私見によれば、階級概念の二つのレベルの関連についてのエンゲルスの見解は明瞭であり、彼は「生産関係レベル」の階級と「運動主体レベル」の階級とを還元と表現という概念を使って関連させているのである。このエンゲルスの見解を、政治闘争をもつばら経済的諸関係に還元し、もって、政治闘争を経済的諸関係の直接的表現としてとらえるならば、それはいわゆる経済決定論の見地にはかならず、マルクスの「唯物論的方法」とは区別されねばならないであろう。晩年のエンゲルスがこうした経済決定論の見地に

対して自己批判をまじえつつ反論を加えていることは周知のとおりである(8)。

晩年エンゲルスの反論にもかかわらず、経済決定論といわないまでも経済還元主義的傾向はその後のマルクス主義的思考に根づよく残存してきたように思われる(9)。こうした経済還元主義的傾向に反対して理論的作業を進めている論者の一人がルイ・アルチュセールである。彼は歴史的現実を「経済的なものによる最終次元での決定の上への有効な諸決定(上部構造および、国内的、国際的な特殊な諸状況から生じる)の集積」としてとらえる「矛盾の重層的決定」という独自の見解を打ち出している(10)。

近年、アルチュセールの理論から示唆を受けつつ、スチュアート・ホールはマルクスの階級概念における二つのレベルの関連について興味深い考察を試みている。彼は『共産党宣言』から『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』を経て、『資本論』・『フランスの内乱』等の後期の著作における階級分析をフォローし、『共産党宣言』における経済的階級と政治的階級を直結させる見地から、『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』における「複合的単純化」の見地(政治を階級利害の直接的表現としては扱わない)へとマルクスの階級分析が進展していると述べ、「階級闘争の理論とは、経済的なもの、政治的なもの、イデオロギー的なもの、という種々の在り場所と諸審級での階級諸関係を、矛盾を含み転位を示す諸代表として『統一』する理論である」と結論づけている(11)。つまり、ホールは階級の経済的構成と政治的構成との直接的応応という考え方を退けて、両者を「代表の形態と代表の過程」(12)という媒介の論理を導入することによって関連づけようとしているのである。以上のように、マルクスの階級概念における二つのレベルをどのように関連させてつかむかという問題をめぐって諸論議が進行中であるが、本稿はそうした論議を総括して独自の見解を提示することを意図したものではない。本稿は、従来、こうした問題で引き合いに出されることの多かったマルクスの『哲学の貧困』における「即自的階級」から「対自的階級」への発展という定式を検討し、そこにこめられたマルクスの真意を明らかにしようとするものである。こうした作業は、階級概念

における二つのレベルの関連というテーマを真正面から論じることにはならないが、やや迂回的にそれにアプローチするものとなろう。

II 「即自的階級」と「対自的階級」

従来、マルクスの階級概念における二つのレベルの関連について十分に掘り下げた分析が試みられたとは必ずしも言えないのであるが、この点に関して、しばしばマルクス『哲学の貧困』の一文を典拠として「即自的階級」から「対自的階級」への発展・転化が語られてきた。そのさい、「即自的階級」は「生産関係レベル」での階級に、「対自的階級」は「運動主体レベル」での階級に、ほぼ等置されたものとして理解されてきた(13)。ところで、マルクスの一文を、経済的諸条件に規定された客観的存在としての階級（即自的階級）が明確な階級意識をもつ組織された闘争集団（対自的階級）へと発展していくプロセスを定式化したものと解釈できるであろうか。同じことだが、マルクスの一文は生産関係レベルでの階級（即自的階級）が運動主体レベルでの階級（対自的階級）へと発展していくプロセスを叙述したものであろうか。そこで、問題の一文を検討することにしよう。

マルクスは、『哲学の貧困』第2章第5節ストライキと労働者の団結において、労働者のストライキと団結（労働組合）に反対するブルードンの所説に反駁し、近代産業の発達とともに労働者の団結も進展してきたことをイギリスに即して叙述し、次のように述べている。

「経済的諸条件がまず最初に国民大衆を労働者に転化させたのである。資本の支配は、この大衆にとって、共通な一つの地位を、共通な諸利害関係をつくりだした。だからこの大衆は、資本にたいしてはすでに一個の階級である。しかし、まだ、大衆それ自体にとっての階級ではない。さらに、われわれがその若干の局面だけを指摘した闘争において、その大衆は自己を相互に結合するようになる。大衆自体にとっての階級に自己を構成するのである。大衆の防衛する利害が、階級的利害となる。しかし、階級対階級の闘争は一つの政治闘争である」(14)。

上記の一文を「即自的階級」から「対自的階級」

への発展を定式化したものと理解する論者の一人として鈴木安蔵氏をあげることができる。氏の見解はそうした理解の一つの典型をなしていると思われるので、ややくわしく氏の見解を引用することにする。

「階級を以上のように解するならば、階級関係は、その成員が充分に、その関係を意識するといなとにかかわらず、客観的に成立し存在する社会関係である。『何百萬という家族が、その生活方法、その利害、その教養を、他階級のそれから分離し、他階級と敵対的に対立せしめているような経済的諸生存条件の下で生活しているかぎり、彼れらは、一つの階級を形成しているのである』（マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』、『全集』第8巻、194ページ。ただし、訳文は同じでない——引用者）。すなわち、人々は、意識すると否とにかかわらず、この客観的な社会関係、生活条件によって、その生活の仕方、考え方、教養等を決定される。階級内部における一定の共通な心理、感情、世界観、風習、生活様式、利害関係が成立し、他階級と異なる生活圏が成立する。しかも社会生活における結合ないし対立・闘争の原理、主体としての階級が機能を発揮しうるためには、この客観的実在は、成員によって意識され、組織化された表現をもたねばならぬ。『個々の個人は、彼れらが他の一階級にたいして共同闘争を遂行せる必要をもつかぎりでのみ、一つの階級を形成する』（マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』花崎泉平訳『新版ドイツ・イデオロギー』135ページ。ただし、訳文は同じでない——引用者）。すなわち『彼れらの利害の同一性が、彼れらの間において何らの一致をも生ぜず、何らの国民的結合も、何らの政治的組織をも生み出さないかぎり、彼れらは、何らの階級も形成していない』（マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』、前掲書、194ページ。ただし、訳文は同じでない——引用者）。客観的に形成され存立する階級関係……中略……を、他の諸階級にたいする独自の自階級の地位、条件、利害、その利害の実現の方法、そのための組織、行動方針を、成員が意識し、団結し行動するにいたるとき、すなわち階級意識に目ざめるとき、『初

めて社会的範疇としての階級が成立する』(Max Adler, *Die Staatsauffassung des Marxismus*, S.100.——引用者)。客観的実存として存在する階級、『それ自体としての階級』(une classe vis-à-vis, Klasse an sich) から、自覚せる階級、階級意識に目ざめ、自己を階級として団結し行動する階級、『自分自身のための階級』(classe pour elle-même, Klasse für sich) に発展する」(15)。

以上の引用から、マルクスの階級概念についての鈴木氏の見解を次の三点にまとめることができるだろう。第一に、階級概念を二つのレベルにおいてとらえていることである。階級は、一方では、成員の意識にかかわらず「客観的に形成され存立する階級関係」(「それ自体としての階級」)として、他方では、客観的実存としての階級関係の「成員によって意識され、組織化された表現」としての階級、すなわち「階級意識に目ざめ、自己を階級として団結し行動する階級」(=「自分自身のための階級」)として、把握されている。前者が「生産関係レベル」に、後者が「運動主体レベル」にそれぞれ対応する階級概念であること、いうまでもない。第二に、「それ自体としての階級」(=「生産関係レベル」の階級)から「自分自身のための階級」(=「運動主体レベル」の階級)へ発展すると考えられていることである。つまり、二つのレベルの階級概念は発展段階を異にするものとされている。第三に、階級概念における二つのレベルを区別する基準として「階級意識」が重視されていることである。「それ自体としての階級」(=「即自的階級」)と「自分自身のための階級」(=「対自的階級」)とは階級意識の有無によって区別され、それゆえに、発展段階を異にするものとみなされているのである。

鈴木氏は『哲学の貧困』・『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』等を典拠としてマルクスの階級概念を上記のように理解しているが、このような理解の仕方は文献解釈として問題はないのであろうか。まず、『哲学の貧困』について検討してみよう(『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』については後述する)。

III 「即自的階級」と「対自的階級」の真意

すでに述べたように、マルクス『哲学の貧困』の一文は、しばしば、「即自的階級」から「対自的階級」への発展を定式化したものと理解されてきた。そこで、まず指摘しておきたいことは、マルクスの一文には「対自的階級」と訳されている Klasse für sich という用語は確かに存在しているが、「即自的階級」に対応すると思われる Klasse an sich といった用語は見当たらないことである。「即自的階級」と「対自的階級」とは対をなすカテゴリーのはずであるが、「即自的階級」に関しては、それはマルクス自身の用語ではなく後世の人々による造語だと言わなくてはならない(16)。

マルクスの一文中に「即自的階級」なる用語が存在しないことは確かであるが、「即自的階級」に対応すると推測される用語はないわけではない。再度マルクスの文章を引用してみよう。「だから、この大衆は、すでに、資本に対する一つの階級であるが、しかし、まだ、大衆それ自身のための階級ではない」(17)。念のため、この箇所についてマルクスのフランス語原文とカウツキーおよびベルンシュタイン翻訳のドイツ語文を示してみよう。

フランス語文—Ainsi cette masse est déjà une classe vis-à-vis du capital, mais pas encore pour elle-même.(18)

ドイツ語文—So ist diese Masse bereits eine Klasse gegenüber dem Kapital, aber noch nicht für sich selbst.(19)

前後の文脈を考慮に入れると、この文における「資本に対する一つの階級 (une classe vis-à-vis du capital), (eine Klasse gegenüber dem Kapital)」と「大衆それ自身のための階級 ((une classe] pour elle-même), ((eine Klasse] für sich selbst)」(20)とは範疇的に区別されている用語であり、労働者階級の異なる発展段階をあらわしている用語と考えてさしつかえないように思われる。そのように考えるならば、「即自的階級」はなるほど造語ではあるが、根拠のない造語ではなく、マルクスの「資本に対する一つの階級」に対応する用語であると推察できるのである。

ここまで来ると、問題はマルクスが「即自的階級」という用語を使ったかどうかということよりも、マルクスの一文を、客観的実在としての階級が組織された闘争集団としての階級へと発展していくプロセスを述べたものと解釈することが妥当であるか否かということである。それでは、問題のマルクスの一文は全体として何を主張しているのであろうか。この点について服部文男氏は次のように述べている。

「マルクス自らの言葉からも明らかなように、この一段の叙述は、その前の部分で略述された労働者階級の成立とその闘争の発展過程を理論的に要約したものである。すなわち、資本主義的生産とともに生まれた労働者大衆は、共通の利害をもつことによって『資本にたいする階級』であるが、『団結』の形成と発展によって『大衆自身にとっての階級』となり、その闘争は政治的性格をおびることになる、という趣旨と解することができる」(21)。

服部氏が言われるように、マルクスの一文は「労働者階級の成立とその闘争の発展過程を理論的に要約したものである」。そうだとすれば、「資本に対する一つの階級」も闘争の発展過程にあるものとして把握されねばならない。すなわち、「資本に対する一つの階級」としての労働者階級は何の運動も闘争も展開しない「客観的実在」ではなく、個々ばらばらではあっても、それぞれの資本家に対して賃金増額等の労働条件改善を要求し、時にはストライキで抵抗するなど不十分ながら一定の運動を展開している存在なのである。私は、鈴木氏とは異なり、マルクスのいう「資本に対する一つの階級」すなわち「即自的階級」を「生産関係レベル」ではなく、「運動主体レベル」の階級概念としてとらえるべきだと考えるものである。つまり、マルクスの一文は「生産関係レベル」の階級から「運動主体レベル」の階級への発展を述べたものではなく、運動主体レベルの階級を未発達な段階と発達した段階に区分し、前者から後者への発展を論じたものなのである。以上のことは、労働者階級の成立とその闘争の発展過程を『哲学の貧困』よりも一般的な観点から論じている『共産党宣言』と対比すればさらに明確になるであろう。

「ブルジョアとプロレタリア」と題された『共

産党宣言』第1章では、資本主義の発達にともなうブルジョアの台頭およびブルジョアとの対抗関係のなかでとらえられたプロレタリアの闘争の発展過程が大略以下のように叙述されている。封建社会の没落から生まれた近代ブルジョア社会はブルジョアとプロレタリアという二大階級の対立する社会である。中世都市の城外市民から生まれ出てきたブルジョアは、近代の大工業が現われ世界市場が成立するに及んで、ますます資本を増大させ、中世から受け継がれてきた諸階級を押しつけて経済的・政治的支配をかちとった。この過程でブルジョアはきわめて革命的な役割を果たした——封建的・家父長的諸関係の解体、生産手段の不断の改良、世界市場による諸国民の全面的交通と全面的依存関係の成立、未開な国を含むすべての国々の文明化、政治上の中央集権化、巨大な生産諸力の実現等々。こうしたブルジョアの発展とともに、プロレタリアすなわち近代労働者の階級も発展する。

さて、プロレタリアの闘争の発展過程は次のとおりである。まず、「ブルジョアにたいする彼ら（プロレタリア—引用者）の闘争は、彼らの存在とともに始まる」(22)。そして、「最初是个々の労働者が、次には一つの工場の労働者が、その次には一地方の一つの部門の労働者が、彼らをちよくせつ搾取している個々のブルジョアとたたかう。…中略…この段階では、労働者は、全国に散在して競争のために分裂している群である」(23)。こうして、資本主義的大工業の発展とともにプロレタリアの人口が増大し、プロレタリアの大群が形成される。機械の導入はプロレタリアの労働の差異を解消し、一様に賃金を低い水準に押し下げ、プロレタリアの利害と生活水準を平均化していく。こうして、「個々の労働者と個々のブルジョアとの衝突は、ますます二つの階級の衝突という性格をおびてくる」(24)。労働者はブルジョアに対抗するために同盟 Koalition(労働組合など)や結社 Assoziation(政党など)を組織するようになる。こうした労働組合や政党に結集した労働者階級の闘争こそ、それまでの一労働者、一工場、一地方において行われていた個別的、分散的な闘争とは質的に区別される「一つの全国的闘争」であり、「一つの階級闘争 ein Klassenkampf」なのである。この

段階での階級闘争は必然的に国家権力に対する闘争であり、この意味で「政治的闘争 ein politischer Kampf」である。こうして、プロレタリアの存在とともに始まるブルジョアに対する闘争は、はじめは個々のブルジョアと個々のプロレタリアの闘争にとどまっているが、やがて、労働組合や政党が組織されると、階級と階級との全国的闘争へと、政治的闘争としての階級闘争へと発展していくのである。

以上に見た『共産党宣言』の叙述と『哲学の貧困』の叙述とを比較してみると、『哲学の貧困』における「資本に対する一つの階級」（「即自的階級」とされているもの）が『共産党宣言』における、一労働者として、一工場の労働者として、一地方の労働者として、自分を直接に支配している資本家に対して闘っている労働者階級と対応していることは明らかである。同様に、「大衆自身のための階級」は『共産党宣言』における、労働組合や政党に結集して全国的闘争を展開している労働者階級に対応しているのである。このように、「資本に対する一つの階級」（＝「即自的階級」）は単なる「客観的実在」ではないのである。マルクスが言うように、「ブルジョアジーに対する彼ら〔プロレタリアー引用者〕の闘争は、彼らの存在とともに始まる」。「資本に対する一つの階級」（＝「即自的階級」）としての労働者は、労働組合や政党を結成して全国的闘争を展開する以前の、労働者一個人として、一工場の労働者として、一地方の労働者として、直接的支配者である資本家と闘っている労働者である。だから、「資本に対する一つの階級」（＝「即自的階級」）は階級闘争の初歩的で未発達な段階における労働者階級をさしたものである。

ところで、マルクスの階級概念について『哲学の貧困』とともに、しばしば引用されるのが『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』の一文である。鈴木氏も「即自的階級」と「対自的階級」について述べる際、この一文をも典拠としていたので、簡単ながらこれに言及しておきたい。

周知のように、『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』は1848年2月の7月王政の崩壊（2月革命）から1851年12月のルイ・ボナパルトのクーデターによる権力樹立までの政治史を分析したもの

である。マルクスはこの著作の最終章である第7章で7月王政の崩壊からクーデターの成功までの全経過を総括しつつ、ルイ・ボナパルトの権力とその社会的支柱である農民（分割地農民）との関係について分析し、ボナパルトを自分たちの代表とせざるをえない分割地農民の存在諸条件を明らかにしている。マルクスによれば、「分割地農民はおびただしい大衆である。その成員たちは、似たりよったりの事情のもとで生活していながら、おたがいのあいだで多面的な関係を結ぶということがない」(25)。農民たちはそれぞれの分割地で自給自足的生活を営んでおり、彼らの間に限定的で狭隘な結びつきはあるものの、「多面的な関係 mannigfache Beziehung」や「豊かな社会関係 Reichtum der gesellschaftlichen Verhältnisse」(26)が発展する余地はなかったのである。マルクスはこのような経済的諸条件に起因する分割地農民の孤立性を指摘したのち、次のように述べている。これがマルクスの階級概念に関してしばしば引用される一文である。

「(A)数百万の家族が、彼らをその生活様式、利害、教養の点で他の諸階級から区別し、それと反目させるような経済的生存諸条件のもとで生活しているかぎり、彼らは一つの階級をつくっている。(B)分割地農民たちのあいだにたんなる局地的な結びつき lokaler Zusammenhang しかなく、利害の同一性ということから、彼らのあいだにどんな共同関係も、全国的結合も、政治組織も生まれてこなかぎり、彼らは階級をつくっていない」(27)。

上記のような「分割地農民は階級をつくっていて、階級をつくっていない」といった叙述はある種のレトリックを含んだ表現であって、その正確な理解は必ずしも容易ではない。しかし、さしあたり、分割地農民は生活様式・利害などの客観的基準に照らしてみれば他の階級と区別される一つの階級をなしているが、彼らは局地的な結びつきにとどまっていて、共通の利害のもとに全国的組織や政治的組織を結成するに至っていないから、完全な意味では階級になっていない、というのがこの一文の主旨であると理解することができよう。別の言い方をすれば、分割地農民は「生産関係レベル」では確かに階級であるが、「運動主体レ

ベル]ではきわめて不十分な段階にとどまっている階級だということである。このマルクスの一文に関して鈴木氏は引用文(A)における階級を「客観的実存として存在する階級」として、引用文(B)における、全国的結合をなし政治組織をもつ階級を「自己を階級として団結して行動する階級」として解釈されているものと察せられるのであるが、こうした解釈は基本的に妥当なものと思われる(28)。

IV マルクスにおける階級闘争の概念

前節で述べたように、「即自的階級」から「対自的階級」への発展とは「生産関係レベル」の階級が「運動主体レベル」の階級へと発展していくことではなく、階級闘争において未発達な段階にある階級がより発達した段階の階級へと発展していくことを意味していた。「即自的階級」と「対自的階級」は階級闘争の異なる発展段階に対応した概念として位置づけられるべきである。そのように考えると、それでは階級闘争の未発達な段階と発達した段階を区別する基準はなにか、そもそも階級闘争とはいかなる概念かということが問題となろう。そこで、マルクスの階級闘争概念をやや立ち入って考察することにしたい(29)。マルクスの階級闘争概念については、彼の比較的初期の著作である『哲学の貧困』や『共産党宣言』において、その骨格はほぼできあがっていたように思われる。マルクスの階級闘争という概念はかなり独特の意味あいをもっており、そこには少なくとも次のような三つの含意が存在している。それらについて『哲学の貧困』・『共産党宣言』を中心とし、後期の著作をも参考にしながら考えてみることにしよう。

第一に、マルクスが階級闘争という場合、それは個々の労働者と個々の資本家との闘争ではなく、総労働者と総資本家との闘争を意味していた。「個々の労働者と個々のブルジョアとの衝突は、ますます二つの階級の衝突という性格をおびてくる」(30)。『資本論』にも次のような表現がみられる。「こういうわけで、資本主義的生産の歴史では、労働日の標準化は、労働日の限界をめぐる闘争

——総資本家すなわち資本家階級と総労働者すなわち労働者階級とのあいだの闘争(ein Kampf zwischen dem Gesamtkapitalisten,d.h.der Klasse der Kapitalisten,und dem Gesamtarbeiter, oder der Arbeiterklasse) ——として現われるのである」(31)。階級闘争が個々の労働者と個々の資本家との闘争でなく、総労働者と総資本家との闘争であるということは、それが労働者や資本家の個々の利害ではなく、労働者や資本家の全体の利害すなわち階級的利害をめぐる闘争だということでもある。「大衆の防衛する利害が、階級的利害となる」(32)。このように、階級闘争概念には階級全体の利害(階級的利害)をめぐる総資本家と総労働者との闘争という意味あいが存在しているのである。

第二に、階級闘争とは、労働者の団結の発展という点から見れば、局地的・地方的団結から全国的団結へと到達している労働者階級の闘争を意味している。換言すれば、階級闘争は地方的闘争でなく、全国的闘争である。「交通手段の発達は、さまざまな地方の労働者をたがいに結びつける。だが、どこでも一様な性格をもっている多くの地方的闘争を集中して、一つの全国的闘争、一つの階級闘争とするには、結びつきさえあれば、それで十分である」(33)。労働者の全国的闘争が行われるためには労働組合や政党という全国的組織が結成されねばならない。このような全国的闘争組織による全国的闘争の展開が階級闘争概念には意味されている。

第三に、階級闘争は全国的闘争組織としての労働組合や労働者政党による、資本家階級の掌握する国家権力に対する闘争である。つまり、階級闘争は政治闘争なのである。『共産党宣言』でマルクスは「ブルジョアジーの内部分裂を利用して、法律の形で労働者の個々の利益の承認を強要」した「イギリスの10時間労働法」(1847年制定)を労働組合や労働者政党による階級闘争=政治闘争の成果としてあげている(34)。労働者階級の政治闘争についてはマルクスのF・ボルテ宛の手紙(1871年11月23日付)が重要である。そこでは労働者階級の政治闘争が経済闘争との関連で説明されている。「政治運動にかんする所見。

労働者階級の政治運動は、もちろん労働者階級のための政治権力の奪取を最終目的として

もっており、そのためにはもちろん、ある程度まで発達した、労働者階級の事前の組織が必要で、そしてその組織は彼らの経済闘争のなかからおのずと生い育ってきます。

しかし他方、労働者階級が階級として支配階級に対抗し、そとからの圧力によってこれに強制を加えようとする運動は、すべて政治運動です。たとえば、個々の工場なり個々の組合でストライキ等によって個々の資本家から労働時間の制限をかちとろうとする試みは、純粋に経済的な運動です。これにたいし、八時間労働法等の法律をかちとるための運動は政治運動です。そしてこのようにして、いたるところで労働者の個々ばらばらな経済的運動のなかからひとつの政治運動、すなわち、彼らの要求を一般的な形で、つまり、一般的で、社会的に強制力をもつ形で貫徹するための階級の運動が生まれてくるのです」(35)。

ここでマルクスは「個々の工場なり個々の組合でストライキ等によって個々の資本家から労働時間の制限をかちとろうとする試み」が「純粋に経済的な運動」であるのにたいして、「八時間労働法等の法律をかちとるための運動」は「政治運動」であり、個々ばらばらの経済運動から一つの政治的運動が発展すると述べている。マルクスにとって経済的運動と政治的運動を区別する基準は何であろうか。前者が労働者の個々の要求を当事者たる個々の資本家にぶつけ、その要求を個別的に解決しようとする運動であり、後者が労働者の要求を法律などの一般的で社会的に強制力をもつ形で実現しようとする運動をさすことは明らかである。両者は労働者の要求とその実現の方法が質的に一個別性と一般性という点で一異なるのである。

いうまでもなく、労働者階級の個別的な要求（階級としての要求）を一般的で社会的に強制力をもつものとして実現する場所は国家である。それゆえ、労働者階級の政治闘争は国家を舞台として展開され、そこにおいて全国的闘争組織としての労働組合や労働者政党は自分たちの階級的な要求をブルジョアジーに強制し、法律等の形でその要求を一般性（普遍性）の高みにまで引きあげ全社会的に承認させるのである。こうした政治闘争は労働

者の個々ばらばらな経済的闘争から発展してくる、というのがマルクスの趣旨である。「階級対階級の闘争は一つの政治闘争である」（『哲学の貧困』）、「あらゆる階級闘争は政治闘争である」（『共産党宣言』）という命題は以上のような労働者階級の経済闘争から政治闘争への発展という文脈のなかで理解されねばならない。

以上に見てきたように、マルクスの階級闘争概念には(1)階級的利害をめぐる総資本家と総労働者との闘争、(2)労働者の全国的組織による全国的闘争、(3)国家権力に対する政治的闘争、という意味あいがかめられていた。これらの三つの含意を満たしている場合が完全な意味における階級闘争概念であり、それは発達した段階の階級闘争をさしている。これに対して、未発達な段階の階級闘争とは、(i)個々の資本家と個々の労働者との個別的利害をめぐる闘争、(ii)労働者の地方的組織による地方的闘争、(iii)国家権力とのかかわりをもたない経済的闘争、をさす。それらの闘争は発達した段階の階級闘争ではないが、それに転化する可能性をもつものであるから、階級闘争ではないと言い切ってしまうのは当を得ないであろう(36)。くりかえすことになるが、マルクスは階級闘争の発展を、個別的利害をめぐる闘争から階級的利害をめぐる闘争へ、地方的闘争（団結）から全国的闘争（団結）へ、経済闘争から政治闘争へ、というふうにとらえていた。これが前述の(i)(ii)(iii)の闘争を階級闘争範疇から排除せず、未発達な段階の階級闘争とみなした所以である。

結 語

前節で階級闘争概念の三つの含意を考察し、階級闘争における未発達な段階と発達した段階とを区別したのであるが、かかるものとしての階級闘争概念と『哲学の貧困』における「即自的階級」および「対自的階級」とを照らしあわせると、次のような結論が得られるのである。すなわち、「即自的階級」とは、いまだ階級的利害をめぐる闘争に至らず、全国的闘争組織も未結成の、依然として経済闘争の域を脱しえない段階の労働者階級、階級闘争の未発達な段階の労働者階級をさし、「対

自的階級」とは前述の三つの含意を満たしている階級闘争を展開している労働者階級、階級闘争の発達した段階の労働者階級をさしている、と。ここで確認すべきは、「即自的階級」は階級闘争が未発達な段階の階級であって「客観的実在としての階級」(=「生産関係レベル」の階級)と同一ではないということである。

以上のように、われわれは階級概念における二つのレベルの関連を、『哲学の貧困』の一文を典拠に「即自的階級」から「対自的階級」への発展というふうに説明する見解を批判的に検討した。その結果、マルクスの一文は階級闘争における未発達な段階と発達した段階を区別し、前者から後者

への発展を述べたものであって、「生産関係レベル」の階級から「運動主体レベル」の階級への発展を述べたものではないことが判明した。「即自的階級」から「対自的階級」への発展という定式は階級概念における二つのレベルの関連をどのように把握するかという問題を解くものではなかったのである。では、その定式は全く無意味かといえれば、決してそうではない。前述の定式は階級闘争の未発達な段階と発達した段階を質的に区別し、前者から後者への発展を明らかにすることによって、階級闘争の発展過程の法則性をとらえているのであって、ここにその定式の理論的意義が存するといえよう。

(註)

- (1) 階級概念における二つのレベルについては渡辺菊雄『歴史科学と階級闘争の理論』(校倉書房、1977年)第1章および第2章を参照されたい。渡辺氏は私のいう「生産関係レベル」の階級概念を「社会経済的な階級概念」とし、「運動主体レベル」の階級概念を「階級闘争における階級概念」とされている。なお、レーニンの著作を中心として論じたものに佐々木一郎「レーニンの階級闘争論から一大衆的自覚化・組織化と階級関係の変動一」、『科学と思想』第19号、新日本出版社、1976年1月、がある。
- (2) K・マルクス『資本論』第3部、『マルクス・エンゲルス全集』(以下、『全集』と略記)第25巻第2分冊、大月書店、1130ページ。
- (3) 『資本論』以外から「生産関係レベル」の階級概念を挙げておく。「ブルジョア社会の内部的仕組みをなし、また基本的諸階級が存在する基礎となっている諸範疇。資本、賃労働、土地所有。それら相互の関係。都市と農村。三大社会階級」(マルクス『経済学批判要綱』第1分冊、大月書店、30ページ)。なお、レーニンも階級概念を二つのレベルで用いているが、それについては前掲の渡辺・佐々木の両氏の著作を参照されたい。
- (4) マルクス・エンゲルス『共産党宣言』、『全集』第4巻、484ページ、傍点・ドイツ語一引用者。Marx-Engels Werke (以下、MEW)と略記)、Bd.4, S.471。
- (5) 「運動主体レベル」の階級概念の使用例を二、三あげておく。「個々の諸個人は、彼らがある他の階級に対して共同の闘争をおこなわねばならないかぎりにおい

- てのみ、ひとつの階級を形成する」(マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』、花崎泉平訳『新版ドイツ・イデオロギー』、合同出版、1966年、135ページ)。「彼らを悩ました蛇にたいする『防衛』のために、労働者は団結しなければならない。そして、彼らは階級として、彼ら自身が資本との自由意志的契約によって自分たちと同族とを死と奴隷状態とに売り渡すことを妨げる一つの国法を、超強力な社会的障害物を、強要しなければならない」(『資本論』第1部、『全集』第23巻第1分冊、397ページ)。「一般に、労働者階級が闘争できるためには自国内で自己を階級として組織しなければならないこと、自国が彼らの直接の闘争の舞台であることは、全く自明のことである」(マルクス『ゴータ綱領批判』、『全集』、第19巻、23ページ、傍点・マルクス)。
- (6) F・エンゲルス、『フランスにおける階級闘争』(1895年版)への序文、『全集』第7巻、518ページ。
- (7) エンゲルス、前掲書、519ページ、ドイツ語捜入一引用者。MEW, Bd. 7 S.512。
- (8) エンゲルス、1890年8月5日付および同年10月27日付「K・シュミット宛手紙」、同年9月21-22日付「J・プロホ宛手紙」(以上『全集』第37巻所収)、1893年7月14日付「F・メーリング宛手紙」および1894年1月25日付「W・ボルギウス宛手紙」(以上『全集』第39巻所収)参照。
- (9) 例えば、丸山真男氏による「基底体制還元主義」というマルクス主義の「思考傾向」の特徴づけを想起されたい。丸山真男『「スターリン批判」における政治の

- 論理」, 同『増補版現代政治の思想と行動』(未来社, 1964年), 323ページ参照。
- (10) ルイ・アルチュセール「矛盾と重層的決定」, 河野健二・田村伊訳『甦るマルクス』I (人文書院, 1968年), 125—184ページ参照。
- (11) スチュアート・ホール「マルクスの階級論における『政治的なもの』と『経済的なもの』」, 大橋隆憲・小山陽一ほか訳『階級と階級構造』(法律文化社, 1979年)参照。
- (12) ホール, 前掲書, 65ページ。
- (13) N・ブハーリンは『史的唯物論』(1921年初版発行)で述べている。「すべてこれらの事情が, 階級が生産過程において一定の役割を演ずる人びとの総和としてはすでに存在しているのだが, 自覚した階級としてはまだ存在していないというような状態をもたらすのである。階級はここに存在はしているが, まだ『意識的ではない』のである。階級は生産の要素として現存している。それは生産諸関係の一定の総和として現存している。だがまだここには, 階級は, 何を欲し何を志向しているかを知り, 自らの特殊性, 自分たちの利害と他の階級の利害との対立性を意識した社会的, 自立的な勢力としては, 存在していないのである。階級の発展過程のこのような異なった状態を示すために, マルクスはふたつの表現を用いている。すなわちかれはまだ自覚に達していない階級を『即自的』階級とよび, すでに自らの社会的役割を意識している階級を『対自的』階級と名づけている」(佐野勝隆・石川晃弘訳『史的唯物論』, 日高六郎他編『現代社会学大系』第7巻, 383—384ページ。なお, この訳書の原本は1923年刊行の第2版である)。それに続けて, ブハーリンはマルクス『哲学の貧困』第2章第5節に叙述されている文章を典拠として引用している。ここで, ブハーリンは, 全体として, 「階級意識」が自覚されていない段階から「階級意識」が自覚された段階への「階級の発展過程」を述べているが, この場合, 彼は「階級意識」が自覚されていない段階の階級を「生産の要素」および「生産諸関係の一定の総和」としての階級(私のいう「生産関係レベル」の階級)と同一視し, それをマルクスの「即自的階級」とみなしているのではないだろうか。つまり, ブハーリンには, 「階級意識」が自覚されていない段階の階級＝「生産諸関係の一定の総和」としての階級＝「即自的階級」という等式が成立していると思われるのである。こうした等式は後に検討する鈴木安蔵氏の見解においてきわめて鮮明になっているといえよう。かつて私も氏と同様な理解をしていたことがあり(拙稿「マルクス社会理論と産業社会論」, 『社会学年報』IV, 東北社会学会, 1970年), 本稿は過去の見解への反省にもとづいたものである。
- (14) マルクス『哲学の貧困』, 『全集』第4巻, 189ページ。
- (15) 鈴木安蔵「階級」, 『社会科学講座 第3巻 社会構成の原理』(弘文堂, 1950年), 144—145ページ。念のために言えば, 鈴木氏はこの引用文の末尾の「『自分自身のための階級』(classe pour elle-même, Klasse für sich)」に註をつけマルクス『哲学の貧困』第2章第5節を典拠として挙げている。
- (16) おそらく, 「即自的階級」も「対自的階級」もヘーゲル論理学の用語を転用してつくられた言葉であろう。だがその由来を探ることは他の機会に委ねたい。
- (17) マルクス, 前掲書, 189ページ。ただし, 訳文は少し変えてある。
- (18) Karl Marx, *Misere de la philosophie*, Editions Sociales, 1961, p.177.
- (19) Karl Marx, *Das Elend der Philosophie*, MEW, Bd. 4, S.181.
- (20) 括弧(キッコウ)のなかの語は引用者が補ったものである。
- (21) 服部文男「階級および階級闘争」, 服部文男編『講座史的唯物論と現代 2 理論構造と基本概念』(青木書店, 1977年), 296ページ。なお, 服部氏の論文は『哲学の貧困』第2章第5節を理解する上で大変参考になったばかりでなく, マルクスの階級および階級闘争概念についても教えられることが多い論文であったことを付記しておきたい。
- (22) マルクス・エンゲルス『共産党宣言』, 『全集』第4巻, 483ページ。傍点—引用者。
- (23) マルクス・エンゲルス, 前掲書, 483ページ。
- (24) マルクス・エンゲルス, 前掲書, 484ページ。
- (25) マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール18日』, 『全集』第8巻, 194ページ。
- (26) マルクス, 前掲書, 194ページ。MEW, Bd. 8, S.198.
- (27) マルクス, 前掲書, 194ページ, ドイツ語挿入—引用者。なお, (A), (B)は行論の便宜上引用者が付したものである。参考までにこの引用文に直接に接続する文章を掲げておく。「だから, 彼らは, 議会をつうじてであれ, 国民公会をつうじてであれ, 自分の階級の利益を自分の名まえで主張する能力がない。彼らは, 自分で

自分を代表することができず、だれかに代表してもらわなければならない。

- (28) 鈴木氏の解釈については前掲の註(14)を参照。ただし、鈴木氏が「客観的実存として存在する階級」を「即自的階級」と同一視している点は支持できない。
- (29) 以下において階級闘争という場合、とくにことわらないかぎり、すべて資本主義社会のそれをさしている。
- (30) マルクス・エンゲルス『共産党宣言』『全集』第4巻、484ページ。
- (31) マルクス『資本論』第1部、『全集』第23巻第1分冊、305ページ、ドイツ語検索—引用者。MEW, Bd.23,

S.249.

- (32) マルクス『哲学の貧困』、『全集』第4巻、189ページ。
- (33) マルクス・エンゲルス『共産党宣言』、『全集』第4巻、484ページ。
- (34) マルクス・エンゲルス、前掲書、484ページ。
- (35) マルクス、1871年11月23日付「F・ホルテ宛の手紙」、『全集』第33巻、266ページ、傍点—マルクス。
- (36) ちなみに、レーニン是个々の資本家と個々の労働者との闘争を「階級闘争の弱い萌芽」と述べている。レーニン「われわれの当面の任務」、『レーニン全集』第4巻、大月書店、230ページ、参照。